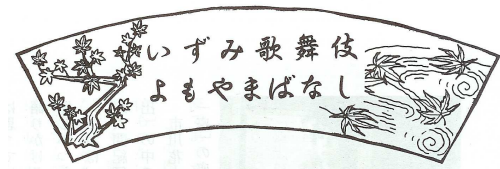


3月2日の「**押元さん**」にご出演の
押元篤治さんの名役着ぶりを紹介します
 (2007年10月のいずみ歌舞伎公演DVDより)



今回は、それぞれの思いを一言ずつ聞き取りました。

「幕前」にパンフレットからの抜粋をご覧ください。

人情噺 文七元結 家主 甚八役 押元篤治
 今回で三回目です。どちらかと言えば過去二回は、若く見せる役でした。今回は、長屋の大家さん、味のある年寄役です。兎に角、難しいです。何としてもがんばります。

人情噺 ぶんしちもつとい 文七元結 二幕四場

◆解説とみどころ◆

左官の長兵衛は、大のバクチ好き。金があれば、バクチと酒に使ってしまい、年の暮れになっても、借金を返す事もできない。そんな父を見かねた娘のお久は、自ら吉原の妓楼角海老へ奉公へ出る。角海老の女将は、けなげなお久に心動かされ、五十両の金を長兵衛に貸す。長兵衛は心を入れかえ、バクチも酒もやめ、懸命に働いて金を返すと誓うのだが、その帰り道、文七が五十両の金を紛失して身投げをしようとしているところへ通りかかってしまう。

三遊亭円朝の人情噺を元に、榎戸賢治の脚本で明治三十五年に歌舞伎座で初演された。

文七とのやりとりや、夫婦げんかの中にも長兵衛の滲み出るような人のよさが伝わってくる。きめの細かい人物描写が味わい深い。

第十二回
いずみ歌舞伎

序幕第一場「本所割下水長兵衛内の場」

長兵衛は左官の腕は良いがばくち好きで借金がかさみ年を越せそうにない。みかねた娘のお久は身を売って金を借りようと家出し、それを知った夫婦は狼狽する。



第二場「吉原角海老内証の場」

お久が身を寄せた吉原の角海老の女将からお久の孝心を聞かされた長兵衛は目が覚めて一年後にきっと迎えに来るからと、女将から借金から五十両を借りて帰途に着く。



第三場「本所大川端の場」

長兵衛は店の金五十両を盗られ、身を投げようとする文七を助ける。死ぬしかないという文七を見殺しにはできない長兵衛は娘が身を売って得た金を文七に与えてしまう。



大詰め「元の長兵衛内の場」(いよいよ押元さん登場)

借金した五十両の行方をめぐる夫婦の大喧嘩を、押元さん演ずる大家の甚八が懸命に仲裁しているところに、和泉屋の手代文七が主人清兵衛に連れられお礼にやってくる。



長兵衛の侠気とお久の孝心に感心した清兵衛はお久を身請けし、文七とお久をめあわせたいと願う。



両家の状況を知った家主の甚八は両家の顔を立てながら大活躍で間を取り持つまさにこの場の主役。

甚八の働きで、文七とお久が夫婦となり文七の希望の元結屋を開くことが決まって、“めでたしめでたし”で幕となる。

